

※朗読する際は、自分なりの文章のリズムを意識して、自由に読点「、」を打ち直してください。

テキスト3

『最後の客』

雨が降り続いていた。男はカウンター席でコーヒーを飲みながら、窓の外の薄暗い田園風景を眺めていた。「オルガのレストラン」という名の店だった。

男はちょっとした旅の途中であった。目的地はもう少し先だったが長雨にうんざりしており、何もない田舎道にぽつんと現れたこの店に車を止めたのだった。極端に客が少ないという点を除いて、これといった特徴のないさびれたレストランだった。

「あんた、見ない顔だね。旅行かい？」

あごひげをたくわえた中年の店主が言った。着用しているコックコートはくたびれて黄ばんでいるが、彼の顔はどことなく楽しげに見えた。話し相手ができる喜んでいいのかもしれなかった。

「おれはブルーノ」と、店主が名乗った。

「——まあ、旅行みたいなものかな」と、男は答えた。「ところで、きみがブルーノだとすると、店の名前のオルガというのは誰なんだろう？ きみの奥さんかな」

「娘だよ」ブルーノは笑顔で肩をすくめた。「オルガは街で暮らしている。ここを出てから七年が過ぎた。もう二十五歳になったよ」

「きみは街へ行かないのかい？ 都会で店を開いた方が客が来る。ああ、失礼な言い方だったかな」

「いいや」

ブルーノはおどけたように首を横に振ると、ゆっくりと窓の外へと視線を流した。そして、窓に切り取られた灰色の風景に向かってぽつりと言った。

「なあ、こんな田舎を訪ねて楽しいか？」

「どうだろうな。楽しいはずだと思って車を走らせてきたんだが」

「今のところは？」

「愉快的気分とは言えないな。この雨のせいで」

「なるほど」

ブルーノは妙にすっきりしたような顔で頷くと、そばに置かれていた木箱を引き寄せ、慣れた感じでそこに腰を落とした。

「実は娘に言われているんだ。街で一緒に暮らそうってね。妻とは遙か昔に別れたから、おれの家族は娘だけだ。あんた、どう思う？」

「どう思うって、どう答えて欲しいんだ？」

ブルーノは苦笑とともに一つ息を吐くと、満足げにコックコートのボタンを外し始めた。
「もうこの店を閉めるんだ。あんたがきつと——最後の客になる」

男は驚いたが、店主の表情が晴れやかに見えたのはそのせいかと納得した。

娘のために田舎を去る者もいれば、都会に嫌気がさして田舎へ向かう者もいるというこ
とか——。

男はこのレストランに入ってから初めて笑みを浮かべた。

「この店の最後の客として、私に何かできることはあるかな」

コックコートを脱ぎ終えたブルーノは、軽く腰を伸ばしながら明るい声で言った。

「そうだな、まだ時間はいいのかい？ だったら、オルガのこと、そして、あんたの旅に
ついて話すってのはどうだ——雨が上がるまで」

(了)